

小学生の性教育の効果に関する一研究

—自己・他者受容の変容に着目して—

稲垣 応 顕

(2001年8月29日受理)

A Study on the Effect of Sex Education Applied School Child

— Aim at Exchange of Self-acceptand, and Other acceptand —

Masaaki INAGAKI

キーワード：性教育，小学生，自己受容，他者受容

Key words：sex education, school children, self-acceptance, other-acceptance

I. はじめに

近年のわが国においては、多様な価値観に振り回され自分を見失っている若者達が見受けられる。その端的な徴候が、少年犯罪の多発化であろう。筆者は、それら若者の心理特性として、自己受容・他者受容能力の欠如を考えている。これに関し犬塚(2000)は、「より早く・より正確に・より効率よくを求めるストレス社会の中で、＜中略＞自らを駆り立て、煽り、振り回し」ている若者が目につくと指摘している。また心の重要性については、神谷(1982)が「人の生にこんなにも重みを感じられるのは、その生命に心なるものがあまりにも発達して備わってしまったからなのだろう。人生とは、生きる本人にとって、何よりもまず心の旅なのである」と述べ、Ellis(1987)も「自分の感情に嘘をついて、自分の問題を解決することはできない」と述べている。筆者は、子どもたちの人格の完成を目指す学校教育において、教科教育と共に豊かな人間性を育てることが肝要であり、そのためには心の教育が不可欠であると考えている。心の教育とは、橋本内閣(当時)における中央教育審議会(1997)での、教育改革プログラムに向けた答申以降注目されている言葉である。答申では、子どもたちに育成したい心の内容を「①美しいものや自然に感動する心など柔らかな感性、②正義感や公正さを重んじる心、③生命を大切にし、人権を尊重する心など基本的な倫理観、④他人を思いやる心や社会貢献の精神、⑤自立心、自己抑制力、責任感、⑥他者との共生や異質なものの寛容、」としている。筆者は、この答申の内容に異論はない。ただし、子どもたちの発達段階を考慮したとき、小学生段階では自己受容能力・他者受容能力の基礎を育成することが大切であると考えている。換言すれば、それは自己および他者を大切にする教育が必要ということであり、互いの

生命を尊重し大切にする教育が不可欠であるということの意味している。

この課題に取り組む切り口の1つとして、性教育が考えられる。文部省(1999)も性教育を「人間尊重・男女平等の精神に基づき、人格の発達を目指す指導であり、人間としての在り方・生き方に直接関わる教育活動である」と述べている。すなわち、「性教育イコール生教育」と考えることが出来るのである。

そこで、性教育をどのように実践し評価するかについての示唆が求められる。

II. 目 的

筆者が作成した性教育のプログラムを小学生に適用し、彼らの自己受容および他者受容の資質を向上させることを第1の目的とする。また、上記資質がどのように変容したかを検討することを第2の目的とする。

III. 方 法

1. 対象児童

C県K市の小学校3校における全児童126名(男子59名、女子67名)。

2. 年間計画および授業実践

表1で示した計画に基づく性教育の授業実践を学級活動に位置づけて行った。その期間は、1999年4月から7月であった。なお、これは当県における養護部会での年間計画から題材名を拾い上げ、他の各教科における性教育関連事項を検討し、また性教育において重要とおもわれる事柄を加味し独自に作成したものである。具体的な授業は表2のように計画した。

表1 性教育の年間計画

学年	題 材 名	目 標	主 な 指 導 内 容
1	体をきれいに 誘いに乗らない	<ul style="list-style-type: none"> 体の汚れやすいところや、目に見えない汚れのあることを知る。 下着の取り替えや、入浴の大切さを理解し、自分の体を大切にすることを育てる。 知らない人に誘われた時の対応や危険な場所についての理解を持たせる。 自分は家庭の愛情と保護によりそだてられていることの認識を高め、自分を大切にすることを育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 目に見えない汚れ 身辺処理と清潔 最近の誘拐事件 知らない人に誘われた時の対処の仕方
2	みんな仲良く おへその秘密	<ul style="list-style-type: none"> 仲間と他者受容の大切さの認識を高める（いじめの排除を含む）。 いじめが他者の心を傷つけることの意識を育てる。 へその緒の役割を通して、自分達が母親の体内で大切にそだてられてきたことへの理解を促す。 両親への感謝の気持ちを高め、命の大切さへの意識を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間外れをしない。 相手の心をいたわる。 おへその有る無しさがし おへその役割 両親の気持ちや願いを知る。
3	血液の働き 男の子女の子	<ul style="list-style-type: none"> 赤血球、白血球、血小板の働きを知り、血液の仕組みや働きへの理解を促す。 血液の働きや仕組みを通して、人間の体や両親とのつながりへの認識を深める。 男女の性差に気付き、互いの気持ちや感じ方への理解を持たせる。 自分の性を理解し受け入れることを促す。 	<ul style="list-style-type: none"> 血液型の理解 白血球・赤血球・血小板
4	体を守る働き 育つからだ	<ul style="list-style-type: none"> 血液中の白血球は、体を守る重要な働きをしていることを理解させる。 免疫の仕組みを理解し、体を大切にすることを育てる。 大人と子どもの体の違いを知ること、自分達の体の変化を予測する。 体の成長の個人差や男女差を理解し、他者や異性へのいたわりの気持ちを育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 白血球の仕組みと働き 免疫の仕組み 大人と子どもの体の違い 大人の体の特徴
5	体の成長 男女協力（エイズ教育） 生命誕生	<ul style="list-style-type: none"> 二次成長の発達特徴を理解し、自分の体と気持ちの変化を受容できるよう促す。 大人に近づく自分を自覚し、自他共に大切にできる気持ちを育てる。 男女の、物事に対する感じ方や考え方の違いを踏まえ、その上で互いに仲良くしようとする心を育てる。 生命の神秘に触れ、自分の命が単独で存在しないことへの理解を促す（生命の伝達）。 全ての命の尊さへの実感を深める。 	<ul style="list-style-type: none"> 男女や個人の違い 男女の体の特徴 共に大切な存在 信頼と友情 出生の喜び、命の大切さ 母体の中の胎児 胎児の成長過程
6	病気の予防（エイズ教育を含む） 共に生きる	<ul style="list-style-type: none"> エイズ概念、感染経路、病状、予防への知識を持たせる。 エイズへの正しい理解を通し、他者と共に生きていこうとする態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 病原体、抵抗力と免疫、 概念、感染、経路、病状、 予防 共生、共存、差別、偏見、 人権尊重

表2 具体的な授業計画案

学年	単 元	目 標	備 考
1	体をきれいに	自分の体を大切に使用とする気持ちを育てる。	ロールプレイング 読み聞かせ 自作教材教具
2	おへその秘密	両親への感謝の気持ちと自分を大切にすることを育てる。	人材活用 ロールプレイング 読み聞かせ
3	男の子女の子	自分の性への理解と受容を促し、互いの性への尊重と受容の態度を育てる。	自作教材教具 読み聞かせ
4	育つからだ	男女差や個人差を認め、自他共に大切な存在であることの認識や仲良くしようとする気持ちを深める。	自作教材教具
5	体の成長	大人に近づく自分を理解し、自他共に大切な存在であることの認識や仲良くしようとする気持ちを深める。	自作教材教具
6	エイズ	エイズについての偏見や差別をなくし、思いやりの心を育てる。	ロールプレイング 自作教材教具 読み聞かせ

3. 測定および分析方法

一言で心と言っても、その捉え方は多様である。そこで、筆者は山田・犬塚・稲垣(1996)および稲垣・犬塚・山田(1997)の自己受容・他者受容・グループコンセンサスの効果測定に関する研究を参考に、心を表層面・中間層・深層面に分けて捉え、自己受容・他者受容の変容を分析の視点にエゴグラムチェックリスト、筆者らが作成したSCT(表3)、バウムテストを授業実践の前後で実施した。

なお、それぞれのテストの位置づけは、構成された質問紙法であるエゴグラムチェックリストで心の表層面を、半構成的な質問紙法であるSCTで心の中間層を、非構成的な投影法であるバウムテストで心の深層面を測定することが可能であると考えた。また、分析方法については、エゴグラムチェックリストとバウムテストに関しては、すでに手引きとして刊行されている資料を基にした(杉田, 1990; 林・国吉・一谷, 1970)。SCTについては、筆者らが書き出された反応文を各自ポジティブ反応とネガティブ反応に振り分け、それを持ち寄り一致率を高める方法を採用した。

表3 SCTの刺激文

- ①僕は(私は)、男の子・女の子に生まれて…
- ②男(女)の子は…
- ③僕(私)にとって友達とは…
- ④一人にいる時僕(私)は…
- ⑤僕(私)にとって両親は…
- ⑥家族の中で僕(私)は…
- ⑦赤ちゃんを見ると僕(私)は…
- ⑧僕(私)は、おじいさん・おばあさんと話をすると…

IV. 結果

1. 量的な分析

小学生といっても、その実年齢は6歳から12歳までと幅が広い。そこで、各心理テストを1～3年生の低学年群と4～6年生の高学年群に分けて分析した。

(1) エゴグラムチェックリスト

エゴグラム・チェックリストとは、交流分析の考え方を基に考案された心理テストである。人間の心の要素をCP=Clitical Parent(父親的な要素), NP=Nurthing Parent(母親的要素), A=Adult(大人の要素), FC=Free Child(自由な子供の要素), AC=Adapded Child(従順な子供の要素)に分けて考え、それらの傾向が強いか弱いかを測定するものである。

図1で示したように、低学年では総体的にNPが高くFCが低いパターンが描かれた。ただし、それぞれの得点に大きな差はなくフラットなパターンとなった。このことから、彼らがまださほど自我に目覚めていないこと、母子愛着の強さからと思われる優しさや純粋さを有する者が多い傾向が示された。また、協調性もさほど育って

N=66 (男子33 女子33)

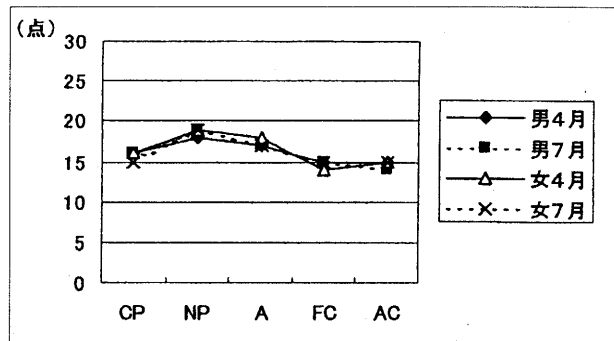


図1 低学年のエゴグラムパターン

N=60 (男子26 女子34)

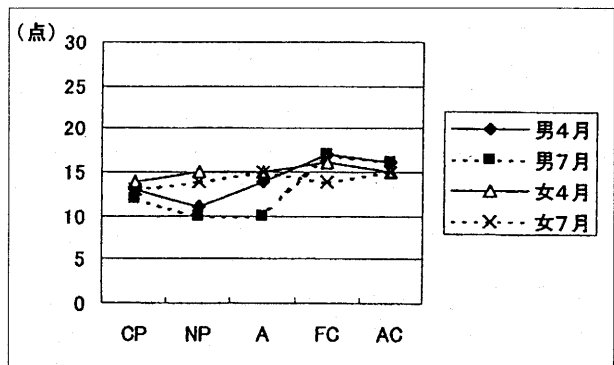


図2 高学年のエゴグラムパターン

おらず、一人一人が孤立した状況にあることが推察された。一方、男女の性差もほとんど認められなかった。これは、彼らが低学年のため性差が著しく現れていないためであると考えられる。ただし、プレテストとポストテストの比較から、わずかながら男子の場合NPが上昇しACが下降している。このことから、他者に対する優しさの向上と周囲に流されることの抑制力の高まりが窺われた。また女子の場合、これもわずかながらFCが上昇しCPが下降している。すなわち、感情の開放性が高まりつつも自己中心性を抑制しつつある傾向が読み取れる。

次に図2で示したように、高学年の全体的特徴として、NPとAが低くFCが高いパターンが描かれた。また、男女差では女子の得点が高く、このグループにおける女子の積極性もしくは成長の早さを感じられる。プレテストとポストテストの比較からは、男子はCPが上昇しており自我の強まりや自己主張能力が高まった反面、自己中心性やわがままさも強まった傾向が示された。一方女子については、プレテストに対してほとんど変化はないが、若干FCが下降している。このことから、自分を見つめる力や妥協性・協調性の高まりを感じられる。特に、男子に比べNPの得点が高いことから、母性的な意識の芽生えが推察される。

(2) SCT

表4で示したように、それぞれの刺激文に対するプレテストとポストテストの反応文の分析に大きな変容は認

表4 低学年のSCT変化

<低学年> N=66 プレテスト ——— ポストテスト - - - - -

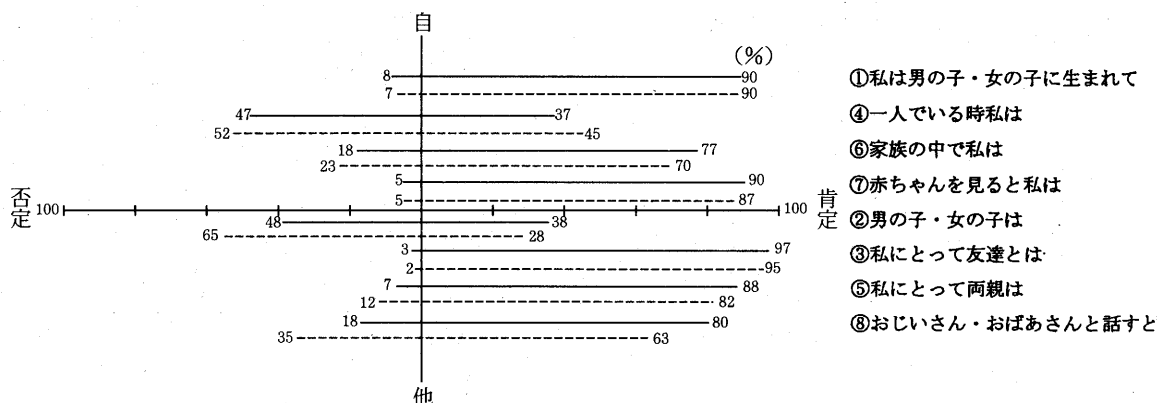


表5 低学年にみられた反応文比較の例

	(プレテスト)	(ポストテスト)
②男の子は、	やさしい	すぐおこる
②男の子は、	「おれ」という	ワギナはない
②女の子は、	一輪車がうまい	大切です
④一人でいるとは私は、	のんびりしている	つまんない
⑤私にとって両親は、	やさしい・つまんない	つまんない
⑦赤ちゃんを見ると私は、	弟とけんかをする	うれしくなる

表6 低学年にみられた反応文の例

- ①「よかった」「うれしい」など
- ②男子は女子を「かわいい」「やさしい」など
女子は男子を「かっこいい」「つよい」など
- ③「○○ちゃん」「なかよし」など
- ④「さみしい」など
- ⑤「やさしい」「大好き」など
- ⑥「小さい」「お母さんが好き」
「かわいがられている」など
- ⑦「小さい」「かわいい」など
- ⑧「楽しい」「おもしろい」など

められなかった。また低学年においては、彼らがまだ幼く家族の中でも甘えられる許容度が大きい存在であり、また受容度の高い状態にあることが推察される反応文が多く認められた。さらに、性的にもまだ成熟に至る段階ではないため、自分を偽ることなく異性を受容している様子が窺われる。稲垣(2000)は、「人を愛するためには、愛された経験が必要である」と指摘しているが、それを踏まえても本研究の結果は好ましいものであると考えられる。一方、低学年においては、否定的な反応文は刺激文4に対してのみ多く認められた。しかし、これはむしろ彼らが一人きりでいることを嫌い、対人関係を望み求めているあらわれと解釈できる。

次に高学年における反応文を表5で示した。プレテストとポストテストを比較すると、ポストテストに一見してネガティブな反応文が多く認められた。しかし具体的にみていくと刺激文①～③の反応文から、同性のクラスメイトは素直に受け入れるが、異性のクラスメイトに対しては虚勢を張る、もしくは付き合い方が分からないゆえの不器用さを感じさせる反応文が見受けられた。これは、発達段階におけるこの時期(思春期前期)の一般的特徴と合致すると考えられる。また同時に、性教育を学んだことで自分を振り返ったあらわれとも考えられよう。ただし、ポストテストにおける刺激文②への反応文では、

男子の場合「女の子は」に「成長が早い」「赤ちゃんを産んで大変」など、女子の場合「男の子は」に「スポーツが得意」「声変わりする」など、異性を受け止める客観的姿勢と共に、他者理解(受容)を窺わせる反応文も認められた。さらに男女比較では、女子が比較的穏やかなのに対し、男子は刺激文⑤で「むかつく」「しつこい」など、⑧で「話が長い」「世話焼き」「おせっかいなところがある」など反抗的・批判的な傾向が示され、自我の強まりが推察された。

(3) バウムテスト

第1に樹木の位置について低学年で55.2%、高学年で62.5%の児童が、未来・外向・主導・積極・社会性を意味する右側に寄せている。このことから、児童達が性教育により視野の広がりを示し、周囲の人間関係に目を向け始めたことが示唆される。第2に樹木の高さおよび横幅について、低学年においては48.3%が高く39.7%が太く描いた。一方高学年では、50.0%が高く57.1%が太く描いた。また逆に、高さが短く細くなった児童が約50%に達している。これは、低学年で性という現実にもれた学習を学んだことで、リアリティショックを生じさせた児童が少なからず存在することを示唆している。しかし高学年では、比較的多くの児童が、性に興味や関心を示しながら授業に望んだと推察できる。第3に自我を意味する

表7 高学年のSCT変化

<高学年> N=60 プレテスト ——— ポストテスト - - - - -

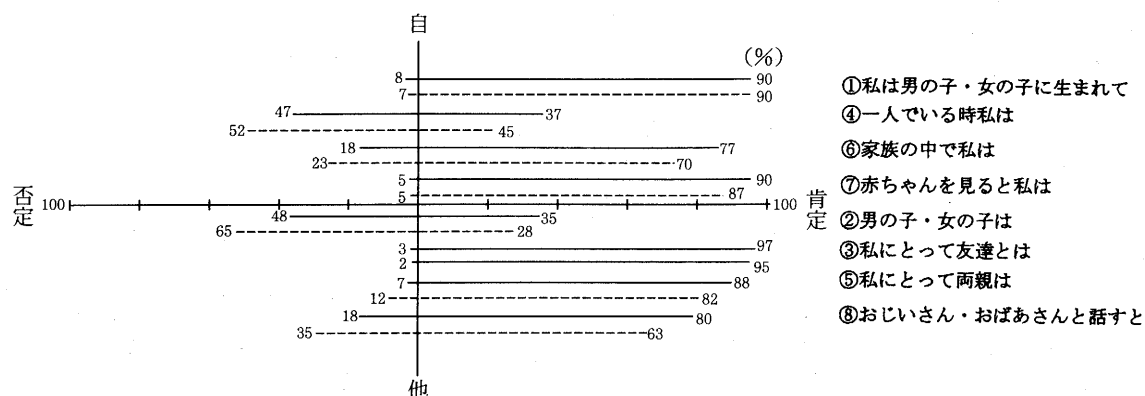


表8 高学年にみられた反応文の比較例

	(プレテスト)	(ポストテスト)
①私は女の子に生まれて	男の子に生まれたかった	良かった
⑤私にとって両親は	両親	大切
⑤私にとって両親は	ちょっとむかつく	こわい、でもやさしい
⑥家族の中で私は	分からない	わがまま
⑧僕(私)は、おじいさんと話をすると	嫌な気分	楽しい時もある

表9 バウムテストの結果(1) 樹木の位置

	プレテスト (cm)	ポストテスト (cm)	差 (cm)	中心が右によった (%)	中心が右によった (%)	変化無し (%)
低学年	695.6	663.2	+32.4	55.2	39.7	5.1
高学年	660.3	612.8	47.5	62.5	35.7	1.8

表10 バウムテストの結果(2) 樹木の高さ

	プレテスト (cm)	ポストテスト (cm)	差 (cm)	長くなった (%)	短くなった (%)	変化無し (%)
低学年	1238.5	1357.0	+73.5	48.3	46.6	5.1
高学年	1263.8	1253.5	-10.3	50.0	48.2	1.8

幹については、低学年では56.9%が長く50.0%が太く描いた。一方高学年では、46.4%が長く44.6%が細く描いた。これは、低学年では性的な自我がさほど育っていないあらわれだと解釈でき、高学年では性に興味を抱きつつも現実の自分の性への戸惑いを有している様子が窺われた。

以下、数字については省略しながらそれぞれの特徴を述べていくが、樹木の傾きについて高学年で右傾斜が減少し左への傾斜を示す者が多かった。ここでも、前述したように彼らが性に興味を抱きつつも、現実の自分の性への戸惑いを有している様子が窺われた。また、葉や実について低学年では減少し高学年では増加した。このことから、異性に自分を表現(アピール)することが、

低学年では弱まり高学年では高まったことが示唆された。さらに枝については、低学年で増加し高学年で減少した。これは、低学年では男女の別なく彼らの対人意識がオープンなのに対し、高学年では異性に興味はあるが実際の接し方にはとまどいを感じる者が多い傾向にあることを示唆している。一方傷や影についてみると、低学年の傷を除いて数値が高くなっている。これらは、低学年においては性に触れたことでの若干の戸惑いを、高学年においては性に目覚めつつある彼らが自己を振り返りナイーブになっているあらわれとも考えられた。

すなわち、バウムテストの結果からは、低学年においては自我がさほど育っていないことから、教師の伝えた

表11 バウムテストの結果（3）樹木の横幅

	プレテスト (cm)	ポストテスト (cm)	差 (cm)	太くなった (%)	細くなった (%)	変化無し (%)
低学年	756.0	798.2	+42.2	39.7	55.2	5.1
高学年	757.4	785.6	+28.2	57.1	42.9	0

表12 バウムテストの結果（4）幹の高さ

	プレテスト (cm)	ポストテスト (cm)	差 (cm)	長くなった (%)	短くなった (%)	変化無し (%)
低学年	728.2	840.3	+112.1	55.9	41.4	1.7
高学年	670.1	613.0	-57.1	46.4	51.8	1.8

表13 バウムテストの結果（5）幹の横幅

	プレテスト (cm)	ポストテスト (cm)	差 (cm)	太くなった (%)	細くなった (%)	変化無し (%)
低学年	245.7	248.2	+2.5	50.0	48.3	1.7
高学年	279.1	255.3	-23.8	44.6	53.6	1.8

表14 バウムテストの結果（6）その他の項目

	低 学 年			高 学 年		
	プ レ	ポ スト	差	プ レ	ポ スト	差
葉を描いた	37.9	32.8	-5.1	33.9	35.7	+1.8
実を描いた	44.8	39.7	-5.1	17.9	37.5	+19.6
枝を描いた	67.2	81.0	+13.8	80.4	69.6	-10.8
背景を描いた	56.9	41.4	-13.7	21.4	19.6	-1.8
傷を描いた	41.3	27.6	-13.7	46.4	55.4	+9.0
影を描いた	6.9	13.8	+6.9	12.5	37.5	+25.0
樹冠の様子 右強調	37.9	21.4	-16.5	29.3	21.4	+7.9
樹冠の様子 左強調	15.5	19.6	+4.1	19.0	16.1	-2.9
樹木の傾き（右）	22.4	16.1	-6.3	29.3	8.9	-20.4
樹木の傾き（左）	24.1	19.0	-5.1	17.9	19.6	+1.7

（%）

性の情報をその通りに受け取る素直さや天真爛漫さが、高学年では自我の目覚めに伴う性への関心と戸惑いが窺われた。

2. 個別の事例検討

事例1 1年男子

まず、エゴグラムチェックリストについて、プレテストではCPが高くACが低いパターンを示し、自己中心性の強さを示唆したが、ポストテストではFCが下がりその他の項目はすべて高くなった。そして、NPが最も高くFCが最も低いパターンを描いた。このことから、自主性や優しさ、協調性が高まり自己中心的な傾向が弱まったことが窺われた。次にSCTについてみると、プレテストでは1、2の自己及び他者の性に対する反応文が空白であった。しかしポストテストでは自己・他者ともに性を肯定していると受け取れる回答をしている。また、家族の中での自分の存在を、プレテストの「子供」

からポストテストの「可愛がられている」に変化させている。すなわち、家族らにおける自己の存在及び家族の触れ合いを感じ、それを肯定的に捉えるようになっていくことが窺われる。一方バウムテストをみると、プレテストでは一見して殺伐とした樹木が描かれた。樹木全体が塗りつぶされており、攻撃的な状況が窺われる。ただし、樹木の右側にそれを支えるような小さな杭らしき物が描かれている。これらのことから、本事例が頼りなさや依存心を強く有していることが窺われた。それに対してポストテストでは幹の傷がほとんどなくなっている。枝は一本の線で描かれており、自信のなさを感じさせるが、その先端には実か葉が描かれ自己表現への意欲を持ち始めたことが窺われる。また周囲には花が描かれ気持ちの穏やかさが生じてきたことも推察された。

本事例は、これまで教師また保護者に言葉が少なく感情表現も乏しい児童であると捉えられてきた。しかし、

3つのポストテストから若干ではあるが自分を肯定的に受け止め感情を表明しようとする意欲が窺われた。同時に自主性や協調性の芽生えも感じられた。



図3 バウムテスト(プレ)



図4 バウムテスト(ポスト)

事例2 5年女子

まず、エゴグラムチェックリストについて、プレテストではAが高くFCが低いパターンを描いた。このことから、物事を客観的・冷静に捉える傾向がある反面快活さに欠ける様子が窺われた。しかしポストテストでは、NPが低くなった他はプレテストと同様のパターンを描いた。ただし、そのポイントはすべての項目においてプレテストを下回った。

この結果から、感情のエネルギーが低まり、内向的になっていることが窺われた。またSCTについて、プレテストでは無反応であった2, 8の刺激文に反応文が記された。特に8については、ポジティブな反応がなされた。また、刺激文4への反応も「小さい」という客観的また外在的な反応から「さびしい」という内面(感情)を表現する反応文に変化を示した。量的分析でも触れたように、この類いの反応は人間関係を指向している表れであり、好ましい傾向であると捉えられる。さらにバウムテストをみると、ポストテストでは筆圧が薄く何度かの継ぎ足しが認められる。幹の右側には瘤が描かれている。これらのことから、現在の自分に対し自信を希薄にし、またいらだちを感じていることが推察される。幹は細くなり薄い傷が見受けられる。さらに、幹の途中に小さいながらも描かれていた枝がなくなっている。これらのことから、本事例が本事例が内向的になっている様子が示

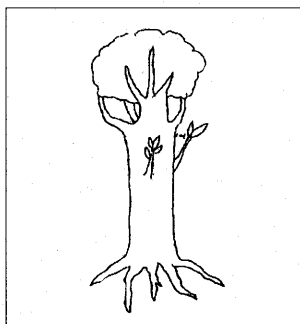


図5 バウムテスト(プレ)

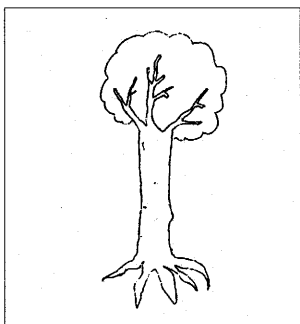


図6 バウムテスト(ポスト)

唆された。ただし、樹冠の後に隠れていた枝が表に出てきている。これは、周囲に流されず自分を偽らずに見つめ始めたあらわれとして考えることも出来よう。

本事例は、これまで教師また保護者に客観的思考能力は高いものの、快活さに欠けるおとなしい性格と捉えられていた。3つの心理テストからもその傾向が窺われた。ただし、同時に思春期・青年期特有の一時的な退行による自己への振り返り(稲垣, 2000)を始めたようにも思われる。

V. 全体的考察と今後の課題

筆者は、性教育は生教育であるとの認識から、心の教育において重要な豊かな人間性として、自分を客観視した上でなおかつ等身大の自分を愛するという自己受容能力と、等身大の相手を受け入れるという他者受容能力に焦点を当て本研究を行った。しかし、児童達は性教育の時間以外にも様々な指導を受けている。また、個人的にも日常生活の中で多様な経験を積んでいる。したがって、本研究の結果が即性教育の実施によるものだとは言いきれない。それを認識した上で上述の結果から、下記の事柄が示唆された。

①約4か月(平均13回)に渡る性教育の結果を測定した心理テストからは、彼らの著しい心理的変容は認められなかった。ただし、それぞれの群を比較すると、下記のような変容もしくは傾向が窺われた。また、全体を平均化すると変化は乏しいが、個別の児童についてそれぞれを検討していくと、全体の傾向だけでは捉えきれない変化、すなわち成長や戸惑いが示された。

②低学年群と高学年群の比較から、低学年では心理的変容の度合いはほとんど見られなかったが、高学年群では各々の心理テスト結果に変化が示され、自己受容・他者受容の度合いに変容が示唆された。教師は、その発達段階を視野に入れ、ボトムアップの授業を展開する必要があることが強く示された。

③低学年に関しては、性への意識がさほど芽生えていないことが窺われた。また、それは男女の間でも差が認められなかった。そして、異性を含む他者に対する親密性も示されなかった。ただし、それは一方では自己及び異性を含む他者を素直に見つめ受け入れていることを示している。また教師の伝える性教育の内容については、リアリティショックを受けながらも素直に受け止めている様子が窺われた。これは、彼らが身体的な意味での性機能が成熟していないというだけでなく、家庭においてまだ甘える側の存在であり、強い母子愛着の延長上にあることの表れだと捉えられよう。

④一方高学年群では、性への関心と共に性意識の高まりに伴う変化が示唆された。また、男女間での自己受容・他者受容の内容にもそれぞれの特性を示された。すなわち、全体的に捉えれば、性教育を学んだことで男女とも

思春期特性の一つである内向化、自己の直面化、自己への問い直し、が促進されたことが窺われた。また、同性の友達は素直に受容できるが、異性に対しては素直に受容できていない様相の強まったことが示唆された。筆者はこのことを、本格的な自己同一性の獲得に向け重要な成長の過程であると捉えている（稲垣, 1997）。また、男子には自我の高まりや自己主張の度合いが促進されるとともに、一見他者批判が高まり異性に対する戸惑いを感じられた。一方女子には、男子に比べ性的な成熟の早さと積極性、自分の性を受け止め比較的穏やかに自己への問い直しを行っている様子を窺わせた。

⑤個別検討で、自己及び他者受容の能力に著しくポジティブな変容を示した事例（事例1）とほとんど変化が認められなかった事例（事例2）を掲げたが、これは同じ内容の授業を行ってもそれだけ児童の捉えにばらつきがあることを示している。教師側の姿勢として、そのばらつきを受容しフォローアップにも留意する必要があることが確認された。

⑥本稿では取り扱わなかったが、本研究では児童の心理状況の変化を捉えるために、心理テストの他、彼らに授業ごとに感想文を書かせる、最終の授業時に a, 授業内容への興味・関心度, b, 授業が面白かったか（授業の充実度）c, 授業内容は役に立つか、の視点から授業評価をしている。またフォローアップとして、最終授業から1か月後に「性教育を学んで（振り返って）」と題した感想文を書かせている。その感想文には、「命の大切さが分かった」「みんなと同じくらい大事にして仲良くしていきたい」「男子とも仲良くすることが良いことだと分かった」「エイズの人が転校してきても、友達になろうと思った」などの記述がなされた。このことから、これらの意識の中に多少なりとも今回の性教育が影響を与えていることが示唆された。

ただし、今後の課題として、以下のことも指摘された。

①本研究では、授業内容や教材を統一して3校それぞれで授業実践を行ったが、各学校ごとのデータに偏りが見られた。それをどのように捉えていくか検討が必要である。

②これまでの授業評価は、感想文などが主流であった。そこで本研究においては、心理テストのバッテリーを組み児童の変化を捉えようと試みた。なお、本研究で用いたテストは、わずかの訓練で現場の教師にも解釈ができるものを選定した。しかし、今後、この他にどのような評価方法があるかについて、検討が必要である。

③前述したように、本研究では性教育の効果について、全体を平均化することで評価した。全体の傾向を捉えるためのことではあるが、今後個別児童それぞれの変化とリアリティショックを抱いた児童を中心としたフォローアップが求められる。

文 献

- 1) 中央教育審議会（1997）教育改革プログラム．文部省．
- 2) Ellis, A. (1987) The evolution of rational-emotive therapy (RET) and cognitive-behavior therapy (CBT). In J. K. Zeign (ed). The Evolution of Psychotherapy. New York: Brunner/Mazel.
- 3) 稲垣応顕（1997）非行傾向を示す男子中学生に対する感情トレーニング適用事例の検討－自己省察の促進に着目して－．新潟中央短期大学暁星論叢 41, 91-106.
- 4) 稲垣応顕・犬塚文雄・山田洋子（1997）看護学生に対するコミュニケーションワークショップの持続効果に関する一研究．関東教育学会紀要, 24, 91-106.
- 5) 犬塚文雄（2000）第4章 生徒理解と生徒指導．稲垣応顕・犬塚文雄 編著わかりやすい生徒指導．文化書房博文社, 60-78.
- 6) 神谷美恵子（1982）心の旅．みすず書房．
- 7) 文部省（1999）学校における性教育の考え方・進め方．大蔵省印刷局．
- 8) 林勝造・国吉政一・一谷彊（1970）バウム・テスト－樹木画による人格診断法－．日本文化科学社．
- 9) 杉田峰康（1990）医師・ナースのための臨床交流分析入門．医師薬出版株式会社．
- 10) 山田洋子・犬塚文雄・稲垣応顕（1996）自己及び他者受容を向上させる体験学習－コミュニケーションワークショップの体験効果に関する一研究－．看護教育, 37(6), 439-444.

追記：本研究に際しては、勝浦市養護教諭部会の先生方の協力を頂いた。